

「団塊の世代」と「逃げ切りの世代」

ライフデザイン研究所 代表取締役社長
山ノ井 清蔵

現在では考え難いことだが戦争直後は1人の女性は平均4～5人の子供を産んでおり、この第1次ベビーブーム(昭和22～24年)の年齢層を堺屋太一氏は団塊の世代と命名した。この世代も今年で52～54歳になる。人数が多いことが良い時にも悪い時にも大きなインパクトをもたらす。巨大な塊が田舎から都会や工場地帯にあふれ、やがて適齢期を迎え結婚し家庭を築いた。家電製品や自動車を購入し、住宅もローンで取得した。このような大量消費を担ったのが団塊の世代であり、また彼らの安価で豊富な労働力が高度成長の推進力だった。世の中が従来のまま持続すれば問題は無かったのだが、一転してこの10年間はバブル崩壊と構造不況の中にある。過去には安価で豊富な労働力を提供し会社の収益に貢献したものの、今ではコストの高い余剰労働力と化し会社の収益の足を引っ張る要因となっている。教育費と住宅ローンの負担も大きい。会社人間として精一杯働いた見返りがこれでは浮かば

れないと思っても、友人の勤めていた会社は倒産し新たな職探しをしていると聞くはまだマシかと自分を慰めている人も少なくない。無事60歳定年を迎え退職金を手にしても国の年金は一部がカットされる。厚生省によると平成10年度に初めて厚生年金の受給者となった男子の平均月額額は20万円。この内の3分の1～4分の1は64歳になるまで4年間ももらえないのである。この一回り上の世代は逃げ切りの世代といわれる。年功序列制度による高賃金と退職金を受け取り、年金も60歳支給開始で経済面の不安材料は少ない。これまでは会社人間で家庭に居場所が無いといわれてきた高齢者も元の職場や地域社会の中から同じ趣味を持つグループができて和気あいあいと楽しんでいる。しかもお金をあまり使わない。老後の心配もあるがお金を自分のために使うことに罪悪感があるという。趣味は俳句、スケッチ、囲碁、散策などを主とし、読書は図書館からの借り本で済みます。海外旅行も元気だから格安ツア

ーで十分に楽しんでいる。年金の一部から貯金にまわす人もいる。すべてがそうとは限らないが団塊の世代からは逃げ切りの世代、食い逃げの世代とうらやましがられても否定はできまい。団塊の世代は大学生当時全共闘運動華やかだったので全共闘世代ともいわれるが、全共闘運動がしりつぼみに終わったように団塊の世代の元気はもう一つである。ひたすら会社人間として育ったためだろうが、逃げ切るには時間がまだかなりある。当研究所の前田正子副主任研究員は東京新聞に月1回寄稿しているが(「新聞を読んで」)、団塊の世代には厳しい見方をしている。例えば日本赤軍の重信容疑者逮捕の報道では団塊の世代は同世代の身内意識からどこか英雄視するにおいが感じられるが、彼女は単なる犯罪者ではないかと切り捨てる。「団塊の世代は過去へのセンチメンタリズムに浸るのではなく自分たちが将来的に社会に与える影響を自覚し次の世代に引き継ぐ社会をつくる責任を果たしてほしい」と訴える。前田副主任研究員はより若い世代なので年金の受給一つとっても団塊の世代より分が悪い。団塊の世代は現役で数も多く社会の中核にいて影響力も大きいから積極的に発言し行動してほしい、夜は会社の仲間と群がり酒を飲みかわし時間を稼いで逃げ切りの世代への滑り込

みだけはやめてほしいというのが本音であろう。もっと若い世代に目を転じてみよう。今春卒業予定の大学生の就職内定率は75%と低率、就職後3年以内の転職率は3割を超えている。もちろん不況の影響が大きいがフリーター志向の人間も少なくない。会社への帰属意識は希薄になっている。仕事嫌いの人間が増えているのは事実だろうが一方で仕事への熱意が衰えていない人も多いはずだ。企業サイドも単なる会社人間ではなく才能のある人間の採用に意欲的になっている。2年前に松下電器産業は退職金分を給与に加算して支払う全額給与支払い型を選択肢として採用し話題を呼んだ。ソニーでは新卒の採用は約500人、これに加えその半数に近い人数を中途採用しており今後は増加傾向にあるという。新卒にとらわれずに才能のある人材を獲得する時代である。米国では20歳代は大学と職場を行き来したり複数の職に就いたりといろいろ試行錯誤の後、30歳前後に本格的に社会に乗り出す人も多いと聞く。しかし日本の若者の場合どうだろうか。会社人間には未来は無い。自己研鑽を重ね市場で通用する能力開発が最重要な時代を迎えている。団塊の世代も逃げ切りの世代も公的な貢献を果たし、若者の良き見本となる生き方を示すことも大きなテーマである。